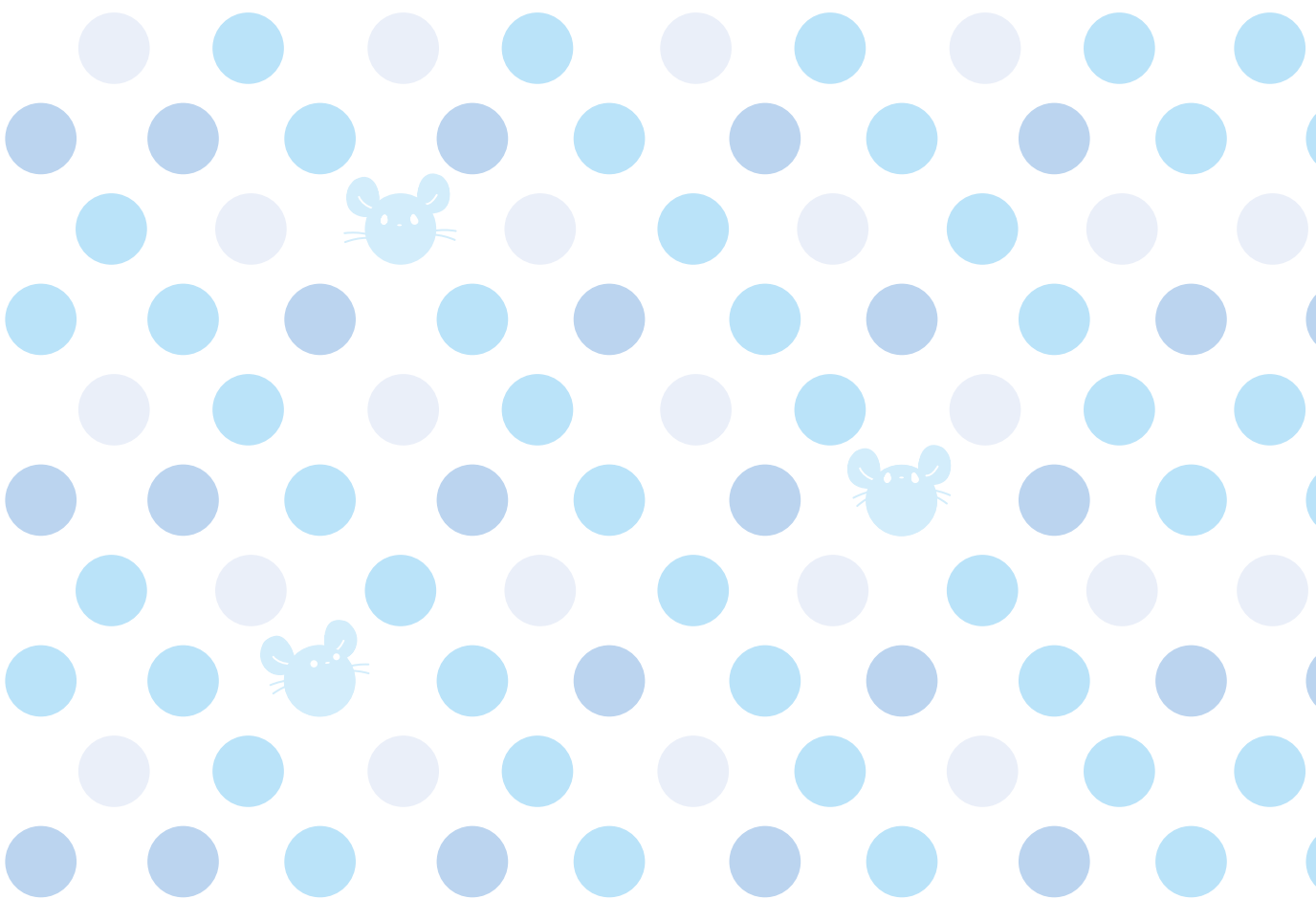


子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2020年1月 NO.213



[もくじ]

- 2～3 言葉の海の羅針盤—『大辞林第四版』編集を終えて…山本康一
- 4～5 伝統だから残すんじゃなくて、そこにある意味を残す。…合田裕子
- 6～7 地域の歴史と考古学…宮里 修
- 8～9 さよなら女流展…山崎晴奈
- 10 まんさい—こうちまんがフェスティバル十七年目を迎えて…吉村光司
- 11 「アンテナ」尊敬する母へ…下尾 仁
- 12～13 高知市文化振興事業団10月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

言葉の海の羅針盤

『大辞林第四版』編集を終えて

山本 康一

中型国語辞典『大辞林』の第四版となる改訂版を編集部の人任者として担当し、昨年九月に十三年ぶりの刊行を果たすことができた。

「中型国語辞典」とは、「一冊ものの大型国語辞典」とも言われ、広く古語や百科語・学術専門用語も収録する語数二十万語を超える国語辞典であるが、規模ではこれを超えて多巻本のものがあり、それを大型国語辞典と呼ぶことから、一冊のものは中型と分類されている。しかし、一冊であることによる使い勝手の良さ、またおおよそ十年程度で改訂を行い、その時々言葉の変化の諸相をきちんととらえていくことによって、人々の日常生活の要に最も広くこたえうる辞書であると思われることから「一冊ものの大型国語辞典」と

いう呼称はあながち言い過ぎとも思われない。

日本における辞書の歴史は、現存しているもので平安時代初期まで遡る。当初の漢字の字典から万葉仮名による和訓の表示、和名の解説、いろは順の配列などの創意工夫と発展を経、江戸期には節用集が盛行、そして明治に入って『言海』が現在の国語辞典の基本形を形作ると、多くの国語辞典が後に続き、改良を重ねながら現代に至る。一九五五年に戦前の『辞苑』に多くの百科語を増補して岩波書店から刊行された『広辞苑』が百科事典としても使える便利な一冊ものの大型国語辞典として人気を博し、世に受け入れられると、三省堂はこれに対抗するべく、一九六〇年に新たな中型国語辞典の企

画を立て、編集事業に着手。しかし、まったく一から築き上げる困難と、時代状況や会社事情にも翻弄され、頓挫しそうになる局面を経ながら、ようやく『大辞林』の名で初版の刊行にこぎつけたのは企画から二十八年を経た一九八八年であった。幸いに新しい中型国語辞典として世の評価を得て版を重ね、第四版は令和初の国語辞典となった。

『大辞林』の新しいところは「二つの現代の視点」という編集方針にある。現代語中心の小型国語辞典に対し、規模の大きい中型国語辞典は、古語から現代語までを収録する。いわば、古語辞典と国語辞典を合わせた日本語の総体を収める辞書とも言える。その場合に問題になるのが、古くから続く言葉

を、古い語義（語の意味）から時代を下って新しい語義へと記述するのか、あるいは新しい語義から古い語義へと記述するのか、である。多くの辞書は古い方から説き起すのであるが、大辞林はまず現代の語義から解説し、古い方に向かって行く。たとえば、「おどろく」は、「①思いがけないことにある、落ち着きを失う」からはじまり、「④目がさめる」が最後に来る。④の語義の後には源氏物語からの用例が続く、平安時代の語義であることがわかる（ただし補注として「現代も四国地方など



で用いられる」とあり、方言には残っていることが示されている。

このように、文化・伝統の礎である過去の語義をしっかりとらえながら、現代人にとって自然に理解できる現在の語義から始めることが「現代の視点」という一つ目。そして、もう一つは、日常語から学術専門用語まで、メディアを通じて世界中を駆け巡る現代の言葉の大きな広がりをとらえて収めていることである。「拡張現実」「特定技能」「免疫チェックポイント」等、社会の変動や科学技術の進展にともない次々に言葉が生まれる。その中には「テレワーク」「シンギュラリティー」「レジリエンス」など多くのカタカナ語や近年は特に「SDGs」「GSOMIA」「IoT」「GAFAM」「5G」などの「アルファベット数字交じり語」とでもいうものも多く見られるようになっていく。

ればならない。今回の改訂においても、これらに意を尽くした。

現在、しかし、辞書は大変な苦境に立たされている。一九九六年の約一兆一千億円から二〇一八年の六九〇〇億円への売上金額の推移に見られるように書籍出版全体が長期的な不況・縮小傾向にある。加えて、学習辞書の市場は少子化により漸減する中、さらに電子辞書などメディアの多様化によって冊子辞書の市場縮小も進む。インターネットの普及によって、情報の流通形態自体が変わってしまっただけでなく、今や言葉も含めて全ての疑問は、まずインターネットの検索に掛けられる。そのこと自体は利便性の高まりとしてけっこうなことではあるし、また、人々の言葉に対する要請にこたえるという辞書の形態は書籍が絶対のものでもなく、今後は電子媒体での利用が主になっていくだろう。しかし、電子媒体であっても、その中身は冊子で培われてきた辞書であり、その冊子辞書は急減している。そして、電子媒体での収益はその落

ち込み分を補うにはまったく足りないのが現状であり、このままでは改訂の原資さえ出ないということになりつつあるのである。

作家の多和田葉子さんはこう言う。「何をするのにもわたしは言語を羅針盤にして進む方向を決める。言語の中には、わたし個人の脳味噌の中よりもたくさん知恵が保存されている。」（『言葉と歩く日記』岩波新書二〇一三年）

言葉は人がものを考え、社会の中で生活して行くために必須の道具である。人が生きていく限り言葉はあり続けるが、より良く生きていくためには、人も言葉について時々考える機会が必要ではないだろうか。辞書は、人が言葉について意識し考えるための絶好の道具であり、また来るべき未来に残す、この時代の言葉の記録でもある。辞書受難の時代ではあるが、将来に向けて辞書のあり方が問われる節目でもある。この節目に電

おどろく・③【驚く・愕く・駭く】（動カ五〔四〕）①思いがけないことであつて、落ち着きを失う。びつくりする。「事の意外さに――」②思い知らされて感心したりあきれたりする。「達者な日本語に――」③「君の世間知らずには――いた」④はつと気づく。「秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ――かれぬる」⑤「古今秋上」⑥目がさめる。「起し給へば、……ふと――きぬ」源光胤「現代も四国地方などで用いられる」

子版のアプリも付属するという形態で『大辞林第四版』を出版したことは、これからの辞書への一つの提言でもある。

高知で生まれ育ち、言葉に関わる仕事をしたと思ったことをきっかけに辞書の世界に入り、いつのまにか三〇年近く経つ。将来に国語辞書をつなげてゆくために、これからも努めて行きたい。



やまもと こういち

一九六六年 高知市生まれ
東京大学卒業後、出版社の三省堂へ入社。現在、辞書出版部長・大辞林編集部編集長。『大辞林』第二版の編集に始まり、『三省堂例解小学国語辞典』『新明解類語辞典』など多くの辞事典の編集に携わる。辞典のデータベース化などにも従事してきた。

伝統だから残すんじゃない、 そこにある意味を残す。

合田 裕子



『時代に飲み込まれた伝統産業・
伝統文化』

国が地方創生を打ち出した頃から、衰退の一端を辿っていた伝統産業・文化（以下、表記を「伝統」にまとめる）にも目が向けられるようになりました。また、インバウンドによって日本人のものづくりや精神性が評価され、それによって日本人自らが足元にあった伝統を見直すきっかけにもなっています。

そもそも伝統が廃れたのには理由があります。単純なことですが伝統に関わる人たちが減ったからです。減った理由はなんでしょう。高度成長期になると伝統は「古臭い」と烙印を押され、非効率・非経済的なモノづくりとして排除され、いくら良い物であっても正し

い評価や対価を受けなくなりました。このことは生活だけでなく作りの手の誇りや後継者までも奪っていききました。

『伝統に目を向けたきっかけ』

私がイ草産業に目を向けたのは平成二十六年。当時私は厚生労働省の委託事業（平成二十二年七月～平成二十七年三月）として、地域（土佐市）の小さいけれどキラリと光るモノコトヒトに光を当てた商品開発や観光メニューを作る事業の事務局長をしていた。五十年ほど前はほとんど国産だった日本の畳は今、中国産が九割を占め、かつて高知県に二千五百軒以上いたイ草農家は土佐市の三軒のみとなっていた。イ草は事業最終年度の平成二十六年度に着手し、イ草

を束ねて飾るインテリア用品『東ね』と観光メニュー『イ草圃場見学』を作った。

メモ・イ草と畳について

イ草は畳の素材。畳の歴史は千年以上にもなり、日本の高温多湿な環境に最も適した日本固有の敷物。イ草と畳には調湿作用・空気清浄作用・リラクゼーション効果などとても優れた力がたくさんあり日本人の身体や心に良い影響をもたらしてきました。また、畳があることで茶道・華道が生まれ、日本独特の美意識やわびさびと言った情感も育みました。同時に畳の暮らしは日本人の長生きで勤勉家、我慢強い、繊細、礼儀正しいなど世界に誇れる国民性も育んできたのです。

委託事業終了後には『じゃばか』を立ち上げ、引き続きイ草事業に取り組んだ。そして、事業が進むにつれ一軒の農家・野村和仁さんの経緯や背景を深く知ることになる。端的に書くと、イ草には品種があり、昔ながらの耐久性があるイ草（品種名・オカサン）を商品として栽培しているのは日本でもおそらく野村さんしかいないこと。オカサンの栽培は大変難しく、環境の変化が激しい現代では、農家の知識・経験・技術・向上心がなければ上手に育たず、商品のクオリティを保てないこと。しかも収量も少ないので労力に見合わないこと。など、たくさんのお話を教わった。後に裏付けのため高知紙業センターで日本の他の品種や中国産と丈夫さを検査した結果、〈オカサンは別格である〉とのこと。墨付きをいただいた。そんな素晴らしいイ草を栽培する野村さんが嘆かれていたのは、どんなに良いイ草を栽培してもちゃんと評価をされないことだった。畳業界の基準は丈夫さよりも見た目の緑色が美しいことが重視されていて、そのための品種改良が積極的に行わ



れてきた。その理由はとても単純で、消費者に分かりやすいし売りやすいからだ。ただ、見た目を重視し丈夫さを失った畳はわずか数年で取り替えなければならぬようなものが多いのも実情だ。畳は毎日足で踏まれるもので決して丁寧に扱ったりするものではない。だからこそ丈夫さが大事なのだ。野村さんのイ草はとても丈夫で、丈夫ということはイ草メモで述べたイ草の効果を最大限に発揮してくれるものだ。私なら野村さんの（イ草の）畳表を敷きたいと思う。ガサツな私などイ草の擦り切れの

ことなんか微塵も心配せず畳の上で暮らしたい。

野村さんがオカサンを栽培する理由は初代（お父さん）の「時代のニーズに振り回されるような畳表ではなく、後々『良かった』と言ってもらえるイ草づくりに打ち込んでいきたい。頑固な生き方と思うが畳を敷いてくれるお客さんを裏切つていけない、お客さんのお金の価値が生きるような畳表を届けたい」との思いからだ。野村さんも「オカサンは親父の信念だから栽培する」とおっしゃっていた。また、事業を進めるうち、畳業界は産地偽装が蔓延^{はびこ}っていることも知った。高く売れるなら結構何でもありだ。中国産を国産にした実例を私も目にした。なんてあさましいのだろう。野村さんの優れたイ草は中国産や偽装畳の価格競争に巻き込まれ、本来の価値が伝わらずにいる。業界の実態を知り、お父さんの考えや生き方に触れうるうち、「こんな真つ当な人とモノづくりが評価されないなんてやりきれない」と腹が立って悲しくなった。本来なら敬意を払い大切にされるべき仕事や人が、し



んどい思いをしなくてはならないのは、人の欲望や思考が原因だ。それが社会を激^{はげ}ませる。歪^{よこしま}ませる。

『私が事業を続ける理由』

イ草もそうだが伝統の真髄は、使う人を使い、暮らしを思つた作り手の仕事観や人生観が形になったものだということ。心のこもつた丁寧で美しいもので暮らす生活は豊かな情緒を育む。豊かな情緒は人を癒し、人を育て、社会を調和に導く。それは数字で測つたり目に見えるものではないけれど、社会にとって大きな意味を持つ。

また、物事に向き合い、気づきを得、考えを深めることは「私」の内面を豊かにしてくれる。人格を形成していく上で根幹となる大事な部分だ。伝統が物事の深い理解^{いさな}へ誘^{いざな}ってくれることを、私自身、身をもって体感している。内面が豊かな人達で形成される社会はきつと清々しく気持ちよい。きれいごとだと言われるかもしれないけれど、私はそうは思わない。まずは自分を豊かにすることが良い世の中へ繋がる。それは誰にでもできるし、今からできる。じゃばかるはそういう未来を描いているし、ささやかだけど伝統を通した私の活動がそのきっかけになればいいなあ、と思っている。

ごうだ ゆうこ

一九六五年 愛媛県四国中央市生まれ

一九九四年より高知県土佐市在住
現在、じゃばかる副代表を務める。

地域の歴史と考古学

宮里 修

考古学は、むかしのゴミばかり拾い集めて酔狂だとか、なにか珍しいものをあれこれ批評して暢気だとか、趣味的な営みと思われるがちだが、人文科学を構成する立派な学問である。考古学は歴史学であるから過去の人間の営みについて考える。哲学や心理学や文学などと共に、人間についての理解を深めるべく日々努力を重ねている。

およそ学問は資料と方法にしたがって独自の分野を構成する。考古学は「物」を資料とすることに最大の特徴がある。多くの人びとは物から歴史が分かることに合点がいかないだろうが、その真髄に到るには幾らか時間をかけた学びが必要なので詳しくは触れない。ここでは他とは異なる考古学の意義深い特徴を紹介する。

特徴の一つには、地中から姿を

現した土器や石器など考古学の資料はかつての人びとが実際に作り使ったものだ、という点がある。それら考古学の資料は、弥生時代なら約二千年前、縄文時代なら数千年前、旧石器時代なら二・三万年前のむかしに本当に存在していた。このリアリティは圧倒的である。堅穴住居跡の床面に立ち、先人の存在に思いを馳せればその感慨は深い。また一つの特徴には、

考古学は文字のない時代、文字のない社会、文字に記録されなかった出来事を考えることができる、という点がある。人類にとって重要な「はじめてのこと」はほとんどが文字の登場以前に起こっている。人類の誕生、埋葬の始まり、定住生活の始まり、農耕の始まり、戦争の始まり、国家の誕生など、人類史のビッグイベントはいずれ

も文字以前の出来事である。それら主題についての研究は考古学の独壇場である。また、文字に記録された出来事は社会全般・生活全般に比べればごく限られたものである。多くの文字記録は上層階級の都合で書かれており、多くの人びとの暮らしには眼が向けられていない。人間に関するすべての物をあつかう考古学はカバーする範囲が広いのである。

一方で、文献史学（一般的な歴史学）は書き残された記録から過去の出来事を非常に詳しく復元する。そこでは名前の分かる個人の行動がよみがえり、ときに感情の機微にまで理解が及ぶ。考古学でも時折、卑弥呼や継体天皇、蘇我馬子といった固有名詞が現れるが、それは彼らの生涯からすればほんの断片である。考古学における時

間の物差しは目盛りが大きく、大抵は五十年ほどの刻みで文化や社会の変化を考える。考古学は個人の生涯をつぶさに追うことができない。考古学が明らかにする時代の変化は、人一人からすれば生涯に一度か二度起こるかどうかの出来事なのである。

但し、人間の暮らしにはゆとりと時間をかけてしか変わらないものがある。一つは社会の制度や在り方（王制とか核家族化）で、また一つは土地の利用方法（住宅地や耕作地）である。表現を換え



朝倉古墳の発掘調査

れば、人と人の結びつき、人と自然の結びつきは長く持続し、時間をかけて変化するのである。そうした人間をとりまく社会環境ともっとも得意とし熱心に取り組む主題なのである。

こうした考古学の特徴は、地域の歴史を考えるととき大きな力を発揮する。人間は文化的背景や社会的背景にしたがって土地に様々な価値を見出す。目の前に同じ低湿地が広がっていたとしても、縄文人はどんぐりの保管に丁度良いと



朝倉城跡の発掘調査

考え貯蔵穴を掘り、弥生人は田んぼに丁度良いと考え畔の囲みをつくるのである。

身近な例でみると、私が勤務する高知大学は、標高百メートルほどの朝倉城山や赤鬼山を西に背負った、鏡川と神田川に挟まれた平野に位置している。朝倉城山や赤鬼山は、縄文時代には木の実やシカ・イノシシなどが得られる食糧資源を生む場とされ、弥生時代には人の往来が確認できる展望の利いた集落となり（朝倉城山遺跡）、古墳時代には先祖を葬る横穴式石室墳がつくられ（朝倉古墳）、古代には朝倉神社の神奈備として神を宿し（赤鬼山遺跡）、中世には急峻な地形を活かした防御要塞である山城となり（朝倉城跡）、近代には軍事目的の展望台が置かれ（陸軍第四十四連隊）、現代の我々にとっては次世代に伝えるべき文化遺産が残る山となっている。平野部は鏡川と神田川の氾濫原で、かつては川筋が縦横に走り所々に中州や浮島状の高まりがある景観であった。縄文時代には人々の立ち寄った形跡があり（柳田遺跡）、

弥生時代には農耕民の暮らしの場となり（鴨部遺跡）、古墳時代には新来の須恵器を用いた水辺のまつりが行われた（柳田遺跡）。また、現在にのこる地名（土居、古市、船戸など）によれば一帯には戦国時代の城下町があったはずであるが、おそらくは後世の開発で失われ、発掘調査でも確認できない。遺跡の消滅に対しては大事な思い出を失ったような喪失感をおぼえる。

我々が暮らす土地を、先人達はそれぞれの眼差しを持って様々に利用した。遺跡はそうしたことを現在に伝えてくれる。当然ながらかつては地域社会の役割も様々であった。春野町の西分増井遺跡は弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡である。農耕社会の成長と人口増加にともなう、各地に集落が広がり地域社会が形成された時代である。西分増井遺跡はこうした時代にあつて当時の革新技術による鉄器の製作を一手に担った。加えて仁淀川を介した流通の拠点ともなり、河内・吉備・阿波をはじめ人々の盛んな往来があつた。

た。西分増井遺跡は古墳時代の開始を前後する時期の土佐最大の拠点集落であつた。西分増井遺跡の往事の隆盛は、もしまだ見ぬ前方後円墳が高知にあるならば、ここであろうと思わせるほどである。遺跡には積み重なった大地と人の歴史がある。遺跡が伝えてくれる先人達の暮らしと土地への眼差しは、地域の特徴や魅力を再発見させてくれる。新しい過去の発見は未来への糧となるのである。

※先ごろ刊行された『遺跡が語る高知市の歩み―高知市史考古編―』（二〇一九年、高知市）では、様々な背景をもった人びとが、現在の高知市域をどのような世界と考え暮らしのかを時代を追って紹介しています。ぜひご参照ください。

みやぎと おさむ

一九七三年 愛知県生まれ
高知大学教育研究部人文社会科学系
系人文社会科学部門准教授

さよなら女流展

山崎 晴奈

年が明け、まだ寒い冬の時期。

新聞を広げ入選者欄の名簿を指でなぞり自分の名前を探し、大きな大きな一喜一憂。そして仲間の名前を探し、おめでとうの連絡をする。そんなことを同じ時期に繰り返しておこなってきた。おそらく多くの女流作家たちも、同じように春の訪れを女流展で感じてきたのではないだろうか。

多くの作家の心を彩り、胸の中の炎を燃やし続けてくれた女流展（高知県女流美術展覧会）が次回四十回展を節目に終わりを迎える。受賞、入選、落選。それに伴う、喜びや悲しみ、悔しさ、自信、闘志。様々な気持ちを引き出してくれた場所。自分を温め、時に厳しく突き放し育んでくれた家が失われるような気持ち。寂しくてたまらない。そしてやはり思うことは今までの感謝の気持ち。閉幕を前に女流展を愛している作家た

ちが集い『さよなら女流展』と題してチャリティー展を開催することとなった。皆で最後の花を咲かせる予定だ。

今回作家としても女流展参加者としてもまだまだ若輩者で歴史の浅い私が、恐れ多くも今回女流展について思いを綴らせていただくことになった。何を書くかと思うと同時に、溢れる気持ちを整理することに難航した。私も女流展で希望をもらい救われたひとりだからだ。自分が社会人になってもなお制作を続けている今があるのは間違いなく女流展のおかげだと言いきれる。女流展に関わり希望をもらった話のひとつとして、思い出話も交え書かせて頂きたい。

【女流展との出会い】

女流展に初入選したのは、私が大学生の時でも落ち込んでいた時だった。美術を学べる学科で

熱望していた油絵専攻に落ちてしまい憧れていた油彩画を専門的に学ぶことが大学内ではできなくなった。そして何より自分の力量が足りなかった現実が心が折れ、絵に対する自信がなくなってしまうていた時期だった。

学校だけが絵の世界だった時期。その中で、その結果は深く重く突き刺さり、全てを否定されたかのような苦しさに押しつぶされそうになっていた。絵、やめようか……物心つく頃から毎日描いて、描くことが大好きで自分の生活から切り離せないものだったのに自分を責めるあまり気が付けばそんなことを本気で考えていた。大学の選考は工芸になるので筆は握らずに残り二年間を励むことになる。ただ、絵に対してかがり火のような消せない気持ちが胸の中でゆらゆら灯り続けていたのが分かった。情熱だけが支配したまま家で何

日も何日も描き続け、絵が完成していた。ちょうど時期は女流展。画材屋で目にした応募用紙を前にとても悩んだ。もし落ちたら、胸に刺さった釘がもっと深く刺さることになる。恐怖が幾度もよぎっていた。そして入選発表の日。自分の名前を見つけ、ちぎれるほど新聞を握りしめ飛び上がった。喜んでことを覚えていて。女流展初入選だった。誰かが少しでもいいと思っただけで選んでくれたことが本当に嬉しかった。飾られた絵を見に行つたあと、美術館の駐車場までひとり号泣したことを覚えている。描いていいんだ。と思え、温かい太陽が私に差し、胸の水が解けていった。この経験がなければ今絵を続けている私はいなかったかもしれない。

もう今では笑い話になったこの話を別の作家に話したとき、私も女流展で立ち直れた。という話を聞いたことがある。また別の作家から、私も初めて入選した公募展だから特別思い出深い。というお話も。女性で制作をされる方の中で女流展での思い出がある人も多いだろう。さよなら女流展での会合の際も、諸先輩方から数々の思い出話を聞くことができた。そ

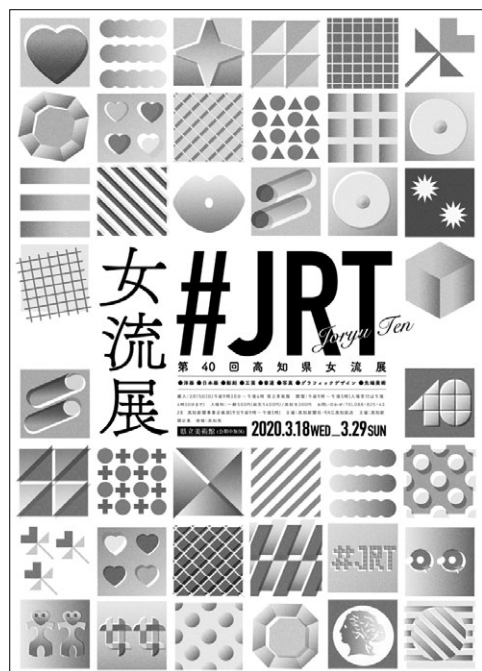
の中で私と同じように女流展で自信や希望をもらえた人がいることを知り嬉しかった。

【広がった世界】

女流展初入選で自信を取り戻せたことをきっかけに、私はそれまで挑戦しなかった大学外の公募展に出展しはじめた。高知市展、県展、中央の公募、インターネットで見つけた県外の公募展。受かったり落ちたりを繰り返し、たとえ結果によって落ち込んでも、女流展で自信が回復できたあの経験から、描いて前に進めば道の先にまた太陽がやってくる、と心から思えるようになった。立ち直るときは一気に急上昇できる回復力が身

につき、私を以前よりもタフにしてくれた。おかげで、私はそれから多くの制作の機会に挑戦することができた。

絵画は主に自宅での制作となりひとりだったが、出展するたびに繋がりが増え、おかげで沢山の作家さんと知り合うことができた。高知に魅力的で力強い作家さんが多くいて、皆自分の置かれて環境の中で逞しく制作と向き合っていることを知ることができた。特に同じ女性で制作をしている方との繋がりはありがたく、その存在に励まされ続けている。自分の世界で描くことばかりだったが沢山の作家さんと触れ合え、世界を広げることができたのは大きな財産となった。



数年前、女流展で青潮賞並びに高知県美術振興会奨励賞に選んでいただき謝辞を読む大役を任された際、自分が女流展にずっと感謝していることを伝えた。そ

して「女性が痛みを伴って新しい命を産みだせるように、日常での悲しみや辛さも含め女性にしか表現できない作品を作れるのだとしたら、これから味わう悲しみや困難も意味があることなのかもしれない」と思える。繊細で豪快な女性だからこそ表現できる世界をこれからも描いていきたい」と述べてももらった。女流展をきっかけに心から思えた素直な気持ちだった。そしてその思いは今も変わらない。

【女流展がつないでいく未来】

女性がかつて立場の弱い存在だったのかもしれない。そんな中、女性が挑戦できる場として生まれ、女流展は多くの女性たちに自信と課題を持たせ、沢山の作家を強くしてきた。もう（性差で分けるような）そんな時代ではなく、なったのかもしれない。以前、『さよなら女流展』の会合で集まった時、大先輩の女流作家さんがおっしゃった言葉で私がもっとも印象的だった言葉だ。四十年間愛されたこの場所は本来の深い役割を終えることができたのだ。最後にありがとうの気持ちを込めて開催されるチャリティー展では女流展を

愛する多くの作家が参加する。

そして最後の力をぶつける最後の女流展には間違いなく力作が集まるだろう。

女流展の最後の輝きを多くの人に見てほしい。受け継がれてきたこの熱く美しい気持ちだけは絶やしてはいけない。自分の舞台で輝く女性の美しさ逞しさを証明してきたこの歴史を次の時代に皆で紡いでいきたい。

※高知県女流展

高知県女流美術展覧会。

高知県在住又は出身の女性が出品できる公募展。

青潮賞は、各部門において特に優れた作品に贈られる賞で、高知県美術振興会奨励賞は、青潮賞の初受賞者を対象に高知県美術振興会から贈られる。

やまさき はるな

一九八五年 高知県土佐市生まれ
高知大学教育学部芸術文化コース卒業。
在学中は金属工芸を専攻。
卒業後も、仕事をしながら制作活動を続ける。個展は過去五回開催。

まんさいーごうちまんがフェスティバル 十七年目を迎えて

吉村 光司

今年も十一月二日(土)・三日(日)の二日間、まんさいーごうちまんがフェスティバル(以下、まんさい)が開催されました。

まんさいは、まんがによる町の振興を標榜してスタートした高知市のイベントで、現在では我々市民有志のボランティアと、事務局である横山隆一記念まんが館が中心となって企画・運営しています。

十七回目となった今回も多彩なゲストをお迎えし、お陰様で大盛況でした。特に開催前から反響の大きかったステージイベントでは、今年新たにまんさい親善大使の任命式が行われ、その場で就任された小野大輔さんをはじめ、大人気声優の方々が、様々なステージに乱入され、来場者にも大変喜んでいただけようです。

このサブライズ乱入については、

常連(?)の来場者からすると「恒例」とすら思われているようで、後日SNSをチェックしていると「やっぱり」「期待通り」といった言葉を見かけました。

これらの演出は、すべてまんさいと高知を好きになってくれたゲストの方々、そしてその関係者のご厚意によるもので、そしてそのほとんどが当日、その場で決まります。それを受け入れる、まんさいステージ班のスタッフ(もちろん全員ボランティア)には本当に頭が下がります。そしてそれ以上に、少しでもまんさいを盛り上げよう、来場者の方々の喜ばせよう!としてくださるゲストの方々に、心から感謝の気持ちでいっぱいです。

まんさいは先述の通り、ボランティアが企画や運営に大きく関わっています。そういったボランテ

ィアの、まんがやアニメ、高知への愛や情熱。さらに来場者や、ゲストの方々に、まんさいや高知を少しでも楽しんでもらいたい、好きになってもらいたいという想い。その「気持ち」の部分がゲストの方々にも届くからこそ、皆さんひと肌脱いでやろう、という気持ちになるのだと思います。

そしてそれは、ゲストの方々に限りません。とある大手出版社の

方々からも「今年もまんさいを手伝いたい。こちらの経費で行くから、何かできることはないだろうか」と連絡をいただき、地元まんが家の方々とトークセッションに参加していただきました。

まんさいに関わってきた皆さんが十七年間ずっと育んできた「まんさいスピリット」とでもいうべきものや、各所との「絆」が、こういった形で実を結んでいます。毎年思うことではありますが、今年には特にそれを実感した気がします。そして同時に、このスピリットと絆を守っていくことの大事さ、責任も強く感じました。

毎年毎年音を上げそうな位しんどいですが、様々な形で応援してくださる皆さんのご厚意に報いるためにも、一年一年、大事に積み重ねていきたいと思えます。ぜひ、応援してください。よろしくお願ひします!

よしむら こうじ

一九八二年 高知市生まれ、高知市在住。

こうちまんがフェスティバル実行委員長



「アンテナ」 尊敬する母へ



下尾 仁

周波数を合わせば、いろんな人と出会い繋がることができる。アンテナを高くたて沢山の人と繋がる。

文化高知「アンテナ」というコーナーを受け持つから今回で十六回目、二カ月に一回の発刊なので早いもので二年半の付き合いになる。「アンテナ」は僕が出会った人の事を書かせてもらっているが、今こうして、この文章を書けるのも、いろんな人との出会いがあるのも、すべて母が僕を生んでくれたおかげである。令和元年八月一日、元氣だった母が急に天国に旅立ってしまった。

今回は母の事を書かせてもらいます。

母はいの町で生まれ、大阪で小さい頃を過ごし、戦争のための

町に疎開したと聞いている。家はそこそこのお金があったらしいが、祖父が騙まされお金は無くなり、いつきに貧乏になり、高校では売店でアルバイトをやり学費の足しにしていたと聞いた。

高校を卒業した母は大阪で就職し父と知り合い結婚。父は佐賀県の人であったが、母の出身地である高知で生活をするようになる。僕が物心ついた頃の母は、アグレッシブでいろんな事をやっていた。

日本舞踊に詩吟、剣舞、フラダンス、絵手紙、僕が小学生の頃はPTA会長など、パソコンを始めれば朝から晩までパソコンとにらめっこ、やがて初心者に教室で教える程に。囲碁を始めた時も本を熱読し、大会にも出場、よく表彰状を貰って帰ってきていた。本当

に何にでも興味があり、何かを始めれば、とことん納得いくまでチャレンジをする人であった。

僕がテレビ高知のじゃらんじやらんモーニングで「下尾仁の流」というコーナーをやらせてもらった時、ディレクターが母にナレーションをやってみませんかと提案、すると母は二つ返事で「やるやる」。

母のナレーションはユーモラスで番組を見た人からよく、あのナレーションは誰? と聞かれた。僕が母ですと答えると、えー凄いと褒められる事は一回や二回ではなかった。本当に何をやっても器用にこなす母には、いつも感心させられた。

そんな元氣だった母が急に亡くなるなんて夢にも思わなかった。

母が亡くなった日、僕はいつもと変わらず店の営業をしていた。

お昼の忙しい時に店のブレイカーが落ち電気が切れた。ブレイカーは母の部屋の隣にある。ブレイカーを上げ、店に戻り仕事の続きをしていると、またもブレイカーが落ちた。滅多に落ちないブレイカーが二度も続けて落ちた。その日の夕方、いつもいる場所

に母の姿が無かったので、母の部屋を覗くと部屋の奥で母が倒れていた。救急隊員も来てくれたが、手遅れであった。後で亡くなった時間帯を聞くと、丁度ブレイカーが落ちたぐらいの時間であった。母は僕を呼んでいたのかもしれない。気付いてあげることが出来ず、お母さんごめんさい。

お葬式も終え、母の部屋を整理していると、僕が連載してからの文化高知が全部まとめて置いてあった。僕には読んでるよとか一言も言わなかったが、母は読んでくれていたのだ。その時、僕は母の愛を感じ、もう枯れたかと思っていた涙が溢れ出た。

お母さん、今までほんとうにありがとう。これからも、出来の悪い息子ですが、天国から見守って下さい。

しもお ひとし

一九六九年生まれ
岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

10月の事業から

キッズオータムパーティーin かるぽーとキャンプ場

会場は、大ホール。そこにキャンプ場を作って、音楽フェスを開催する!? 客席をのけるの? ロビーでやるの? なんて質問を多くの人から受けました。

実態は、こうです。普段はできない、水を使った演出や飲み物販売を可能にするため、まず、大ホールの舞台上ほぼ全面にブルーシートを敷きました。その上に、人工芝と緑のパンチカーペットを敷き詰め、来場者が寝転がれるような空間を作りました。さらに、その上に、ファミリーテントや寝袋、キャンプ用椅子、ステージ等を配置し、音楽フェスの会場を造設しました。そして、周囲に余計なものが目に入らないよう、黒い幕で三方を囲み、残りの一方には、キャンプ場の映像を映し出し、より臨場感が出るように工夫しました。

ホールの入口は、風船や紙ふぶき等で装飾し、暗くなる通路には、光の道を作り、来場者が、わくわくするような経路を意識しました。

こうして出来上がった初めての「かるぽーとキャンプ場」は、音楽フェスを楽しみにした、多くのファミリー層にご来場いただきました。

出演団体の
多種多様な音
楽、雷雨やス
カイダンサー

(大きく膨らむ人形)等の演出に、驚きや歓声を上げる場面もあり、子ども達も、終始にぎやかで、あらかじめ準備していた珍しいドリリンクは全て売り切れてしまいました。

今回の公演は、神奈川芸術劇場(KAAT)の協力を得て、実現しました。

例えると、KAATからいただいたレシピとピザの生地、高知のソースをかけ、地元の特産をトッピングし、高知の窯で焼きあげた本公演。

初めて作ったピザには、いくつかの課題があったものの、高知オリジナルピザとして多くの人に喜んで味わっていただけたことに、ほっと胸をなでおろしました。

〈入場者数 四回公演 計三百二十名〉



Kochi Art Messe -高知アートメッセ-Vol.2

「Kochi Art Messe」は、これからの高知の美術文化を担う若い世代の作家を応援することを目的に、公募作品の展示と販売を行う企画展です。本展は高知で活動する若手作家を多くの人に紹介する場であるとともに、単なる鑑賞だけではなく、来場者に美術の色々な楽しみ方を提案する場を目指し「美術のファン」を増やしていこうとする取り組みです。

出品締切:2020年1月12日(日) 17:00
展覧会:2020年1月17日(金)~2020年1月23日(木)
会場:高知市文化プラザかるぽーと
7階市民ギャラリー 第1展示室

出品に関する詳細は募集要項をご覧ください▶



お問い合わせ: 高知市文化振興事業団 088-883-5071



高知市文化振興事業団

秋冬の市民講座

市民講座は、市民の生活文化の向上、また社会福祉の増進を目的とした公民館活動の中心となる講座の一つとして、その時々の特宜に合ったテーマで年二回開講しています。

今回の秋冬の市民講座は、古典教材として定番の徒然草が、近來の研究で解釈の仕方が変化してきていることを学ぶ『「徒然草」ひろい読み』、運動の秋に楽しく身体を動かすことを目標に体幹トレーニングを行った『体幹を鍛えて楽しくダイエット！エアロボクササイズで脂肪燃焼!!』、他にも『永く楽しめるレカン（麗乾）フラワー生活〜入門編〜』、『ひょうたんランプ作り〜おうちに飾りたくなる世界に一つのオリジナルランプ〜』、『みんなでビブリオバトル〜あなたの心に残る一冊を教えてください〜』という五つの講座の組み合わせで開講し、今まで高知市立中央公民館に足を運んだことのない方にも多く参加していただいた。

なかでも、『みんなでビブリオバトル〜あなたの心に残る一冊を教えてください〜』は、平日の夜にも関わらず高知の大好きな男女が公民館に集まりました。ビブリオバトルとは、持ち寄った本を好きな角度から好きなように語り、皆に読んでみたいと思わせる「本」を決める

ゲームである。詳しくは文化高知No.211の「ビブリオバトルのススメ」でも掲載しているが、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の向上に効果があり、学校や企業等でも取り入れられている注目のコンテンツであるのは間違いない。

講師には、高知工業高等専門学校ソーシャルデザイン工学科の講師で、高知ビブリオバトルの委員も務める佐藤元紀先生を迎え、ご講義いただいた。参加者にビブリオバトルの経験者がいないというので、一回目ルール説明、二回目練習、三回目大会というようなスケジュールで行われた。当初大学の論文発表や仕事でのプレゼンテーション等をイメージしていた受講生が多く、その顔にはどんな本と出会えるのかという期待と発表をすることへの緊張が見てとれたが、佐藤先生のある一言でその場の空気が一気に弛緩した。

「ビブリオバトルはあくまで遊びです。楽しんでください。」

通常の発表やプレゼンテーションでは、発表後に良い点だけでなく、悪い点や改善点などのいわゆるダメ出しのようなものを受けることがあるが、ビブリオバトルはそれを良しとしない。そのため、発表者に堅苦しさや躊躇いといったものが出にくくなり、本に対するその人なりの熱い思いを表現しやすくなっているのがビブリオバトルの魅力だ。実際に練習や

本番を通して知ったのは、発表者の本の説明や本との出会い方だけではなく、思考や性格といった発表者の内面の部分を少し垣間見るような感覚だった。効果は

一目瞭然だった。開始前は緊張からか、お互いに会話をあまりしていなかったグループが、練習を重ねると休憩時間に自然と雑談を楽しんでいる様子が多く見られた。コミュニケーションのツールとして、ビブリオバトルを使うことの有用性を受講生と共に身をもって体験できたのは、生涯学習担当者としても大きな成果であり、今後の自身の読本生活に潤いを与えるものにもなった。

オーテピアでも全国高等学校ビブリオバトル高知県大会が行われるなど高知でも密かな盛り上がりを見せてきているビブリオバトル。普段、書店で自分が手にとらないようなジャンルの本も、ビブリオバトルを通して出会えば、最高の一冊になるかもしれない楽しさがここにはある。

〈参加者数 八十名うち『みんなでビブリオバトル』は十三名〉



批評の力



風俗歳時記

「ゴッドファーザー」という映画は、映画史に残る傑作と言われている。名優と言われる日本の俳優が、「一番好きな映画」としてこの作品をあげるのを一度ならず（テレビで）見たことがある。実は、ずっとそれがひっかかっていた。それほど作品が、という思いである。ギャング映画としての迫力という点であれば、もっと凄い作品がある。名作映画として見れば、「風と共に去りぬ」や「ローマの休日」にはかなわないだろう。私には、この映画は五十年來、「中途半端」だった。

それが一変したのは、昨年、ある映画批評を読んだときだ。平成三十年五月十六日・高知新聞夕刊「あのころ、映画があった——ゴッドファーザー」（立花珠

樹）の一節だ。
（この映画は、アル・パチーノ演じる主人公の）マイケルが、マフィアのドンに「成長」していく物語だ。」とあった。

この「成長」という文字に目が釘付けになった。成長物語としてこの映画を見ると、この観点が私にはなかった。言われてみれば、マイケルの人物像は物語の始めと終わり、大きく変化している。しかし、それを成長と言えるのか？ と思つたとき、「」の存在の重みに気がついた。「ふつう」ではない括弧付きの成長なのだ。そのとき、「ゴッドファーザー」の世界観がずっと入ってきた。ニーノ・ロータの哀愁を帯びたテーマ曲が頭の奥に流れ始めた。

マイケルは、マフィアのドン（ゴッドファーザー）になりたくなるのではない。彼は、大学を出たインテリ青年だった。第二次大戦では英雄的な働きもしている。表社会で政治家になるのが夢だった。けれど、苛烈な運命の下で、ドンとなる道を自ら選んでゆく。背景には、シチリア移民達の悲惨な歴史がある。

マイケルの顔は変わる。純粋な若者だった頃の瑞々しい風貌はしだいに影をひそめ、冷酷なドンの顔に変貌してゆく。この「変化」が作品のテーマであり、世界観だったのだ。以来、この映画に、はまっている。核心を突いた批評は、作品観を変える力を持っている。

（本の虫）



高知を撮る

第35回写真コンテスト入賞作品

何処へ…リサイクル&リユース

小野 智志

（上：平成29年1月23日 高知市弘化台 中：平成30年1月24日 土佐市
下：平成30年1月18日 土佐市）

リサイクルや再利用の為に集められた金属クズ、ガラス瓶、廃棄自動車…最終的に何処へ送られるのだろうか？
ウラン廃棄物、マイクロプラスチック、宇宙ゴミなど新たなゴミ問題も起こっているが、地球は早晩人類のゴミで満杯になるのではないかと心配。

田上パル「Q学」

高校。表現選択科目「演劇」の授業時間帯。「演劇」の授業を選択した生徒たちは、一癖も二癖もある問題児。自称演劇人の非常勤講師によるやる気のない「演劇」の授業は、ただの不良の巣窟と化してしまうが、無気力と情性の時間の連続は、彼女たちの絆を深めていった。しかし、ある時、その授業が研究授業として発表しなくてはならなくなる。非常勤講師の提案に、全員で「走れメロス」を題材にした芝居を作ることになるが…
不良×太宰×演劇。
演劇の神様は、きっと彼女たちを素敵なところに導いてくれるに違いない。

【日時】 2月1日(土) 18:30開演 2月2日(日) 13:00開演
【会場】 高知市文化プラザかるぽーと 小ホール
【料金】 全席自由(日時指定) ※未就学児入場不可
前売り 一般 2,500円(当日3,000円) 高校生以下 1,000円(当日1,200円)

■関連企画「田上豊による舞台上公開ワークショップ」
2月2日(日)終演後の舞台上にて、15:00~16:30開催
対象:本公演を観劇する方 定員:先着20名(チケットをお持ちの方の見学可)

お問い合わせ・お申し込み: 高知市文化振興事業団 088-883-5071

風伯

中国、朝鮮半島、ロシア、そして米国

や尖閣諸島を自国の領土だと言いつつ中国は、日本列島からフィリピンに至るラインをボーダーラインといっているようだ。それはつまり、太平洋を挟み米国と対峙して日本が戦争の草刈場になることを想定している。
第三次世界大戦は必ずある(既に始まっているとも)といわれているが、そうすると北朝鮮や中国の核攻撃、あ

専門家でもなく政治的な意図もまったくない、ごく普通でノンポリの私であるが、この十年ぐらい日本を取り巻く世界情勢が次第にきな臭くなっているのが気にかかる。
この数年の中国軍勢力の増大は米国でさえかなわなくなっているし、米中の貿易摩擦は解決の糸口がない。南シナ海の岩礁地帯を埋め立てての軍事化

るいはサイバー攻撃、宇宙攻撃に日本は今なんの対策も持っていないし、安保条約で米国が日本を守ってくれる保証はない。
藩政時代後期、世界で最も埋蔵量が多いとされたジパングの「黄金」がほとんど米国に持ち出されてしまったが、今でも日本の国家予算(つまり税)の相当な部分が米国に搾取されていることに、断腸の思いでいる日本人は多いはずだ。日本から搾り取れるまで搾り取って、米国本土が傷まない限り、日本を守るわけではない。
原爆を持てる国々の間に日本がある。日本に原爆をもつ能力はあるが、米国はそれを許さない。にわかには原爆を持つべきだというのはない。日本が微妙な場所にあるにもかかわらず、国をリードする人たちに危機感がありにもないのが不思議で仕方がない。米国と入れ替わり、日本が中国の自治区になることを、考えるだけでもおぞましい。(霖)

第190回市民映画会



「誰もがそれを知っている」

(2018年/スペイン・フランス・イタリア)

アルゼンチンに暮らすラウラ(P・クルス)が、妹の結婚式のため故郷スペインに帰省しファン業を営む幼なじみのパコ(J・バルデム)や家族との再会を果たす。しかし、和やかな宴が催されたその夜、突如娘が消え、身代金を要求するメッセージが届き始める。パコは時間稼ぎに奔走し、ラウラの夫もアルゼンチンから駆けつけるが、疑心暗鬼に陥った家族の内に長年隠されていた秘密が露わになっていく…。
極限状況のもと、精神的にも肉体的にも追いつめられながら、刻一刻と変化していく登場人物たちの関係性にひとときも目が離せない。結末に誰もが息をのむ、極上のヒューマン・サスペンス。オール・スペインロケも見どころ。

監督・脚本:アスガー・ファルハディ
出演:ペネロペ・クルス、ハビエル・バルデム、リカルド・ダリン他
配給:ロングライド
2018年/スペイン・フランス・イタリア
© 2018 MEMENTO FILMS PRODUCTION - MORENA FILMS SL - LUCKY RED - FRANCE 3 CINÉMA - UNTITLED FILMS A.I.E.

■同時上映「あなたの名前を呼べたら」
(2018年/インド・フランス合作)

【日時】 2020年1月16日(木)、17日(金) 10:45開演
【会場】 高知市文化プラザかるぽーと 大ホール
【料金】 全席自由(1枚の券で2作品をご鑑賞できます)
一般 1,300円(当日1,500円)
割引 1,000円
(学生証・長寿手帳・障害者手帳等をお持ちの方)

お問い合わせ: 高知市文化振興事業団 088-883-5071

今号の表紙

ねねね

濱口 京子

今年の干支であるネズミをモチーフにし、雪をイメージしたドットと並べることで統一感を出しました。

(はまぐち きょうこ/
国際デザイン・ビューティカレッジ1年生)

【対象】

- ①高知県内に在住する者の学術的著述または他県在住者で高知県に関する事項をテーマとした学術的著述。
- ②2019年1月1日～12月31日に発行された単行本（発行日は奥付の日付による）。

【推薦】

自薦・他薦を問いません。必要事項を所定の推薦書に記入し、該当図書3部を添えて審査委員会へ提出してください（図書は、申し出により審査後に2部まで返却します）。要綱・推薦書をご希望の方には送付します。また推薦書は、文化振興事業団のホームページからダウンロードできます。
受付締切 2020年1月31日（金）

【表彰】

高知出版学術賞・3点以内に賞状と賞金10万円、特別賞・1点以内に賞状と賞金5万円を贈ります。

【推薦先・お問い合わせ】

〒781-9529 高知市九反田2-1
（公財）高知市文化振興事業団内 高知出版学術賞審査委員会
TEL：088-883-5071 FAX：088-883-5069
E-mail：kikaku@kfca.jp

第30回

高知出版学術賞

推薦募集

優れた学術研究の振興は、文化や出版の向上のみならず、広く高知県の発展に貢献します。「高知出版学術賞」は、当該年における、最も優れた学術出版を顕彰することによって、学術研究の振興を図り、県勢の進展に資することを目的としています。



第35回「記録写真部門」
～平成以降の部～ 準特選
真夏のカーニバル 川村香代

第36回

写真コンテスト

どなたでも、一人何点でも応募できます。出品料無料

応募締切

2020年1月31日（金）

発表 3月上旬

作品募集

高知を撮る

テーマ

●記録写真部門

記録性を持った高知県に関する写真

【平成以降の部】（平成以降に撮影されたもの）

【昭和以前の部】（昭和以前に撮影されたもの）

●I LOVE 高知部門

撮影者の好きな高知の風景・風俗等を表現した写真
（2019年1月1日以降に撮影されたもの）

「記録写真部門」については、【平成以降の部】と【昭和以前の部】を設けています。これにより応募作品は2部に分けて審査が行われます。

賞

「記録写真部門」

特選【平成以降の部】、【昭和以前の部】各1点（賞状と賞金3万円）、準特選 部門内で10点以内（賞状と賞金1万円）

「I LOVE 高知部門」

特選2点（賞状と賞金3万円）、準特選 10点以内（賞状と賞金1万円）

※入選作品は両部門合わせて70点以内
発表：3月上旬、出品者に通知

応募要領

- カラー・モノクロともに白や黒の縁の部分を除き、ワイド四つ切サイズ(254mm×365mm)以上
- 組写真は3枚までで、写真の並び順と組写真であることを明記して下さい。
- 両部門ともパネル貼りは不要です。詳しい応募要領は高知市文化振興事業団までお問い合わせ下さい。

応募先

高知市文化振興事業団 写真コンテスト係
（月曜休館。祝日・振替日は開館）
〒781-9529 高知市九反田2-1
高知市文化かるぽーと8階
電話 088-883-5071

入選作品展

日時 2020年3月17日（火）～3月22日（日）
午前10:00～午後5時

※17日（火）は、午前10時より表彰式を行います。

会場 高知市文化プラザかるぽーと 7階 市民ギャラリー・第4展示室
入場料 入場無料



第35回「記録写真部門」
～昭和以前の部～ 特選
昭和64年1月7日昭和最後の日
川西輝道